

中国の環境問題に対する姿勢の変化は中共第17回全国代表大会での胡総書記の活動報告において現れています。経済成長パターンの報告の中に「省エネと環境保護を強化」という項目が新しく入ったのです。中国ウォッチャーの私としては注目すべきところです。

第11次5ヵ年計画(2006~2010年の5ヵ年計画、2006年3月決定)においてはGDP成長率を7.5%にするとしながらも片方では・エネルギー単位消費量の20%低減・主要汚染物質(水におけるCOD、大気におけるSOx)の10%削減が拘束性のある指標として決定されました。

近年の法整備では2000年に「大気污染防治法」において硫黄酸化物(SOx)が排出が基準を超えた場合には罰金と措置命令が新しく入りました。2008年には「水污染防治法」が改正され汚染物質濃度が基準を超えた場合にも罰金と措置命令が入りました。

しかしながら環境汚染の現状は「2006年中国大気環境状況」報告によっても大気環境基準の1級と2級(1級、2級「1年間の100日以上が排出基準をクリアしているという条件」が1999年には33.1%の都市のみが1,2級であったのに2006年には56.6%の都市が基準を達成しているというように前進しています。とは言えすなわち2006年に至っても43.4%の都市が環境基準に達していないということです。

河川の水質においても主要な汚染物質である過マンガン酸塩、アンモニア及び石油類は以前と比べ改善されているとはいえ日本とは随分違います。

河川の水質汚染の数値は7大水系(長江、黄河、珠江、松花江、ワイ河、海河、遼河)における412箇所の測定局において何箇所が基準値(前述の3大汚染物質の基準量)をクリアしていないかというもので日本とは基準の設定自身が違うので比較するのは困難ですが1類(水源になる綺麗な源流の川)、2類(飲用水水源1級や保護区域など)の両方を合わせても2006年で27%の測定局でクリアできていません。3類までが飲用水水源利用可の川ですが3類で19%、そして4類、5類までと劣5類(決めた基準さえ満たさない)の測定値を測定局の54.4%が基準をみたくしていませんでした。

また大気汚染でも日米とは基準そのものが違い直接比較は出来ないものの北京市が発表した汚染程度3級(硫黄酸化物のような粒子の大きい物質「SPM」を対象としている)に対し米国大使館が北京市内の大使館内で測定した「PM2.5(超微粒子)・・・先進国の汚染基準標準測定物質」の濃度は「要警戒レベル」と発表しています。評価対象物質が違うので直接比較は困難ですが北京市の大気汚染は北京オリンピック後においても先進国と比べ悪いといえます。

特に河南省のワイ河流域は貧困県(売血でエイズになった人が多くエイズの村と言われる)では汚染もひどく村医者(正式の医師ではなく1年更新の即席資格者)がNGO「ワイ河衛士」というサイトを立ち上げインターネットで公表してきたために広く知られるようになりました。また貧困村の共産党書記や村民委員会等の党の末端組織は真実「何とかしたい!」と願いNGO「ワイ河衛士」と相談し努力や中央委への陳情を繰り返しています。

「がんの村」の悲劇は企業の垂れ流しによりワイ河の支流から灌漑用水が汚染され 低層井戸水(川と同じ臭いと色) 村民に消化器障害が多発していることを調査し発見されたことに現れています。その内容はNGOの宣伝の影響もあり中国の中央テレビ局(CCTV)が取材、放送しました。その結果放送された「その地域だけ」深井戸が掘られたという事です。しかし保守管理が出来てないため半年経たないうちに電気系統が壊れて水が出なくなった村もあるということでした。

などなど、まだ書ききれない内容が多くありますが総じて政府も不十分ながら環境に力を入れ始めたということは事実のようです。中国にも公害被害者を裁判で援護するNGO「政法大学の教授で弁護士である人が中心となった公害被害者法律援助センター」があり農民1721名が原告となり国有化学工場を被告として1審、2審とも差止請求認容、損害賠償支払い、不法投棄廃棄物の期限を明示した処理命令など画期的な判決が出ました。

しかし工場は現在も普通に稼働しているという事も知りました。印象的なのはCCTVなどの中央テレビ局が報道すると、その村のみが改善されるという事実、重金属などが垂れ流され地下水を通じて住民が飲んで「がんの村」が存在することでした。



(中華人民共和国60周年記念の
国慶節前の天安門あたり)

エコかるたから見えてきた、いまどきの子ども事情

K.A

子どもの頃、かるた遊びは、お正月などに、兄妹やいとこ、友達といっしょに、1枚でも多くの絵札を取りたくて、必死になって遊んだものでした。大きい子達が、小さい子に読んであげたり、大きい子は、読み終わってからしか取ってはいけないとか、なかなか取れない小さい子に、大きい子が手加減をして、わざと取らせてあげたりと、子どもたちの中でルールを作ったり、かるた遊び一つでも、子どもたちの関係作りや、思いやりの心の成長にも役にたっていた気がします。なかなか取れなくて、悔しさから泣いてしまう子もいました。

エコかるたを、幼保育園で実施するにあたって、かるたの内容はもちろん、「みんなでへらそうCO2」なので、エコな取り組みも紹介しながら、子供たちの生活と結びつけるきっかけ作りを心がけています。それに加え、どの子にも平等に札を取ってもらい、楽しんで欲しいという思いから、一人一枚取れるよう、人数を限って、順番にドーナツ状に置いたかるたの円の中に入ってもらい、取ったら円から出るという方法をとってきました。最後にひとり残った子は、Yさんが相手になり、直接対決(?)！結構、これも盛り上がります。(Yさんのキャラクターも重要です。笑)

当初、このエコかるたに参加してくれる子どもたちの反応は、今も昔も変わらず、私が読み終わらないうちに、絵札を探しはじめ、かるたを見つめる目は真剣そのもの、いつ喧嘩がおきるかわからない状態で、その様子は子どもらしくて、いつもほほえましいものでした。

ところが、このかるた取りの様子が、変わってきたのです。去年のことです。いつものように、6人ほどで、取り合っていて、3人の子が残りました。私が読み札を読み終わると、まだ、見つけられず探しています。

「もっと向こうも探してごらん!」「Yさんがいるあたりだよ。」
ヒントを出し続けます。一人の子は私の前にある札ばかり見えて、もう一人はうろうろしているだけ、もう一人は、Yさんの近くに行くと引き返してきます。(なんでわからないんだろう。どういったら気がつかないかな?)私が、焦りながら、迷っていると、先生の声がしました。

「いつまでも、わざとそんなことしないの。ほかの人が待っているよ。」
え!!!?????耳を疑いました。

「わざと……」?

そうなんです。わざと取ろうとしなかったんです。わかっているのに……。その行動が、信じられませんでした。

「じゃあ、時間切れで、3人はアウト!」という、抵抗もせず、従います。先生が「お願いしてもう一度やらせてもらいなさい。」というので、もう一度やると、ちゃんと3人も、取れました。

後日、保育士の友達にこの話をすると、そういうことをする子が増えているそうです。先生に、手をかけて欲しいから、わざと服を着られないフリをしたり、給食を食べるのを遅くしたり、できないわけじゃないのに、自分に注目して欲しい、かまって欲しい子なんだそうです。

なんとなく、心が寂しくなりましたが、たまたまそういう子がいた園だったんだと思い、気を取り直して、次の園に行きました。なんと、また同じことが起きました。ふたりの女の子……

わかっているのに、絵札を見ようとしません。先生も、わかっています。その行動に、私が、

「時間切れ。みんなは、一枚ずつあるけど、あなたたちは、なしでもいい?」

と聴くと、一人の子は、もう一度やりたいたいと言ってきました。でもやはり、一人の子は、取ろうとせず、残りました。私が入って、対戦すると、我先に取りに行きます。やはり、自分にかまって欲しい子なんだと、思いました。

家庭ではどんな生活、親との会話はどんな風なんだろうと想像すると、とても考えさせられます。「子育て支援」という言葉を、よく耳にします。そのための政策も、いくつか考えられているようです。本当の支援というのは、お金では買えないもののような気がします。

エコかるたを通じて、見えてきた子ども事情でした。



エコかるた実施の様子



エコかるた実施での発表の様子

